

物語文読解における主題に関わる推論発問の活用

横田 敦子

1. 問題の所在

読解作業においては、字義的・明示的に示されている情報の理解のみならず、一貫性のある心的表象の構築（vanDijk& Kintsch 1983）が求められる。直接テキスト上にはない情報も既有知識や背景知識を用いながら統合的に解される必要がある。そこに関わる認知プロセスが推論（inference）である。推論は認知的コストの高い技能であり、第二言語読解においてその技能が適切に用いられるかどうかはその言語の熟達度に依る部分も大きい（吉田1998、呂本 2000）。しかし、言語熟達度という制限があるなかにおいても、教師の発問や読解タスクの工夫が学習者の推論生成や深いテキスト理解を促す（吉田2001）との指摘もある。なかでも「テキスト情報をもとにテキストには直接書かれていない内容を推論させる問い」である推論発問は、テキストの不確かな情報に意識を向けさせ、読む目的を明確化させられる1つの起点として機能する（田中2011）。答えが1つである事実発問と比べ、深いテキスト理解を促す問いである（田中

2011、紺渡2011）。一方で、能力や知識が一定ではない様々な学習者がいる教室活動においては、実状に合わせて推論発問をつかひこなすことは難しく「教師が授業で推論発問を活用しようとしても、実際にはうまくいかないことが多い」（田中2011）との指摘もある。

これら先行研究の指摘にある推論発問活用による効果や直面する問題は、授業毎に様々なバリエーションがあり一般化の難しいものであろう。しかし、授業内の読解作業及びその後の論述解答にみられる推論処理を分析することによって、言語習熟度という限りがあるなか、どの範囲のテキスト理解が可能であるかを捉えることで得られる示唆もあるのではないだろうか。本稿では、読み違い等のつまずきがみられた箇所について更なる発問を行った場面に着目する。

2. 先行研究と目的、研究課題

読解過程における推論について推論情報の必然性という観点から区分された分類に、橋渡し推論と精緻化推論がある。橋渡し推論とは、テキスト

表1 推論タイプの分類（Graesser, Singer&Trabasso1994）

タイプ		説明
橋渡し推論	局所的推論	1.Referential 2.Casestructureroleassignment 3.Causalantecedent
	包括的推論	4.Superordinategoal 5.Thematic 6.Characteremotionalreaction
		7.Causalconsequence 8.Instantiationofnouncategory
		9.Instrument 10.Subordinategoal-action 11.State
	精緻化推論	12.Emotionofreader 13.Author'sintent

理解に必要な照応関係、因果関係の関わる推論である。一方の精緻化推論とは、明示的なテキスト理解には関与せず、読みを深めるための精緻化に関わる推論である。橋渡し推論には下位分類として、局所的な情報の一貫性を構築する局所的推論といくつかの情報を統合するための意味的ギャップを埋める包括的推論の2つがある。

物語文の読解に関わる推論を13のタイプに分類したGraesser, Singer, Trabasso (1994) の枠組みにおいても、橋渡し推論と精緻化推論は説明されている(表1)。本稿では、以下で詳述する実践の分析において、Graesser, Singer, Trabasso (1994) の分類枠組みを用いた説明を試みる。

本稿の研究の目的は、5.Thematic (以下表1.) の推論発問の提示を授業冒頭部に行う授業実践の一例において、これらの推論処理がどのように行われるかを観察し、推論発問提示による効果や困難な点について明らかにすることである。

研究課題は以下の2つである。

1. 授業内の読解作業において推論はいかに行われたか。
2. 論述解答の推論生成にはどのようなものがみられたか

3. 授業概要と対象

留学生のための小説読解授業は週1回90分の授業である。1つの物語文につき2、3週に渡り扱った。学生の国籍はベトナム3名、中国6名、マレーシア1名であり、N1レベルの日本語力がある。今まで自身で読み進めたことのある日本語の書籍は、ライトノベル、アニメや映像化されたもの、母語で読んだことのある日本語版である。ノンフィクション、ベストセラー本を積極的に読むと回答し、何冊ものタイトルを挙げた学生もいた。学生全体のコメントとして「読了することなく途中であきらめてしまう」との回答が多かった。そのことから、幅広いジャンルの日本語の文章に触れ、自力でたのしみながら読み進められるようになる

ことを授業目標の中心とした。原則、テキスト本文は、留学生向けにリライトされたものではなくオリジナルのものとし、新しく扱う回の前週に配布した。

4. 分析対象回と授業実践のプロセス

阿刀田高の「来訪者」を扱った回を分析対象とする。「来訪者」は裕福な主婦である真樹子のもとに恵まれない境遇にある中年女性の初江が訪れることから展開する短編ミステリーである。初江の目的が結末に向かって明らかにされる。

授業実践のプロセスは以下のとおりである。

1. (作品の発表年や作者についての説明後) 3 頁程度まで各自黙読
2. 「来訪者のタイトルの意味は? なぜこのタイトルなのか?」(推論発問の提示)
3. 音読を行い、語彙や意味について全体で確認、登場人物把握の確認
4. (登場人物把握のつまずきにより発問)「対比的な関係で捉えられてるのはどの人物とどの人物か」
5. (1.3のプロセスを繰り返し読了後)「真樹子からみて初江はどのような人物か。どのような目的があるか」(推論発問)
7. 論述解答を各自書き、数名がその場で発表
8. 論述解答の提出
9. 二週間後、同問題の論述問題の提示(中間テスト)
10. 教師のテキスト理解についての紹介

読了後、工程5において、改めて主題、要点、教訓などへの推論(5.Thematic) 発問として、「来訪者」の意味への問いかけを行った。「恵まれた／恵まれない」の境界に対する真樹子、初江の認識のギャップから「来訪者」の意味を捉えることを想定解答と考えた。想定解答を導くことが読みのゴールではなく、学生自身が自身の力で読みの作業を進めてゆくことが重要と考え、教師の読み方を示すことは、工程10の中間テストフィードバック

ク時に行った。

5. 授業内の読解作業における推論処理

研究課題1の授業内の読解作業における推論処理について、結論から述べると、格構造の役割理解 (2.Case structure role assignment) の段階における困難が、主題把握である包括的推論の処理にも影響を及ぼしたようであり、工程7における推論発問への解答は、教師の想定解とは異なるものであった。

読み初めの段階において、登場人物の把握が難しいようであった。本文冒頭に出てくる人物が真樹子、次に出てくる「親指をしゃぶりながらまどろんでいる」人物が幸恵であることを確実に捉えることができていない段階で「朝の来訪者は中年の女だった。」という一文があり、「中年の女」を幸恵や真樹子と読み誤る学生が少なくなかった。格構造の役割 (2.Case structure role assignment) 理解や因果関係の把握 (3.Causal antecedent) といった局所的推論段階でのつまずきにより、ある動作をする人物がどのような属性の人物か推論することは難しかった。学生Bのみ「新聞のニュースのなかで何よりも「誘拐事件の記事」に興味を示すことにより、真樹子は母親ではないか?と推論し (7. Causal consequence)、幸恵が乳幼児であることがわかる表現から、二人の母子関係について推論 (3.Causal antecedent) することができた。

登場人物の把握のため「二人の人物が対比的な関係で捉えられている。どの人物とどの人物の対比関係か」との問いを提示した。真樹子と初江それぞれの属性を整理しながら、本文全体を読み進めてもらい、真樹子 (恵まれた) / 初江 (恵まれない) の対比の関係で捉えられている描写が真樹子の視点によるものであることを全体で確認した。そのうえで「真樹子からみて初江はどのような人物か。どのような目的があるか」について記述されている部分をすべて挙げていってもらった。教師が特に重要だと考えた箇所は、以下2つのセン

テンスである。1つ目は、最終部分の段落のセンテンス「恵まれない側の人間が、こちら側に忍び込む一つの道」である。2つ目は、真樹子は「恵まれない境遇」の初江らに札束を投げるが、黒い水面に落ちてしまう夢を見る場面、「初江の企みがわかるかもしれない」との記述がある部分である。実際上記2つのセンテンスを「真樹子からみて初江はどのような人物か。どのような目的があるか」について書かれた文であると捉えることは難しいようであった。最終部分の段落のセンテンス「恵まれない側の人間が、こちら側に忍び込む一つの道」については、物語冒頭部同様、格構造の役割 (2.Case structure role assignment) 理解等の問題から、初江についての描写であるとの読み取りが難しかった。2つ目のセンテンスについても、「初江の企みがわかるかもしれない」との記述を「目的」と同義であると理解することは難しいようであった。「恵まれた/恵まれない」について境界に対する両者の認識のギャップとして捉えることまではなされず、真樹子と初江の対比関係は、社会階層や資産状況の異なりとしての理解に留まった。「初江の目的はお金のためだと思われたが、実際は乳児の幸恵に会うことが目的であった」のような解答が大多数であった。

以下1で、学生の論述解答例を挙げる。

1. 著者が真樹子さんの心理に対しての描写は全文を貫いています。ですから、真樹子さんの視点からみた対比関係が重要です。下は真樹子さんから見た対比関係表です。(※家族関係、資産面、礼儀・外見、社会階層や生活水準といった本文で挙げられていた点から、真樹子、初江の対比が表で示されている) 真樹子さんから見れば、初江は自分に雇われたいので、訪れてきました。しかし、初江の目的は娘の子の状況を確認したあと、高飛び或いは自殺です。ですから、真樹子さんの視点から見た「対比関係」と初江の目的は繋がっていません。(学生A)

一方、「初江は、より素晴らしい生活を孫に送らせた」の文意の解答も一例みられた（以下2）。

自身の孫は「恵まれた」側に移行可能と捉え「恵まれた／恵まれない」境遇の分かつ境界を絶対視していないことを読み取れていた可能性もあるが、「対比の上」の指す意味が明確ではない。

2. 真樹子は幸せかつ豊かな生活を送る貴婦人で、反対に、初江はめぐられない環境に生きています。すでに心が歪んでいた初江は、仕事の関係の上、娘と同じ産む日の真樹子に出会い、最終的にある狂った計画を実行したのかもしれませんが。孫と真樹子の娘を交換させ、そして真樹子の娘を殺したのかもしれませんが。対比の上、初江の孫をより素晴らしい生活を送らせせたのかもしれませんが。（学生B）

6. 論述解答にみられる推論生成タイプの別

本節においては、論述解答にみられた推論タイプについて検討する。

主題に関わる推論発問への解答に際し、出現した推論タイプとそれぞれに該当する学生の解答例は以下の表2に示した。尚、問いである推論タイプ5については除外した。また、推論タイプ3の可能性もあるものと捉えられた記述も散見されたが、ひとつの実践につき工程6、7の計2回行う論述課題である本稿の特性上、3についても除外した。

タイトルの「来訪者」を指すものについて、10名中9名の解答から推論タイプ8が出現した。真樹子の視点からみた「来訪者」とは、「恵まれた」側を訪ねることはあっても用が済んだらその場か

表2 論述解答に出現した推論タイプと論述解答例

	推論タイプ	学生の論述解答例
包括的推論	4. 登場人物がある行為をしたのはなぜか	初江の来訪の目的は、雇われたい、子どもを奪いたい、子どもに会いたいことです（学生C）
	6. 登場人物はどんな気持ちになったか	（刑事から初江の孫殺しを聞いて）真樹子は今の子どもは本当の子どもかどうか迷っています（学生E）
精緻化推論	7. どのような結果となるか（言及がないものへの推論）	警察に捕まることによりもう二度と本当の孫に会うことができなくなる、初江の将来は逃亡や投獄になりかねません（学生B）
	8. ある名詞句が示すものとは具体的になにか	「来訪者」は赤ちゃんの幸恵を意味するです。そして、真樹子の家に来て、赤ちゃんを見に来ていた初江も「来訪者」である（学生G）
	10. ある目的達成にどのような手段や行動がとられたか	（自分の孫娘は明るく幸せな未来があるため、）かわいそうな幸恵を殺し孫娘と交換した（学生F）
	11. 登場人物はどのような性格か、どのような状況か	幸恵と話しただけでいろいろなことが耐えられるなんて、初江は素晴らしい人、親切なおばあさん（学生D）
	13. 筆者はどのような意図や考えがあったか	<p>著書は来訪者の名をつくのは初江のことを注目して読者に初江に人物のことの好奇心を引き出したいと思います（学生D）</p> <p>第一段落「テーブルに広げた新聞に書かれた大田区で起きた誘拐事件の記事」と「初江の分からない厚かましさ」が実際、結局を暗示していると思います（学生A）</p>

ら去らねばならない「恵まれない」側の人間である。幸恵については、「来訪者」となっており、初江と同じ意味の来訪者と捉えるかどうかは解釈による。推論タイプ7で幸恵の今後について言及した解答もあった。

「来訪者」の名称が指す人物については学生によって解釈が異なった。初江（学生D）、初江と警察（学生C）、幸恵（学生E、学生F）、初江と幸恵（学生B、学生G）、初江と警察、幸恵（学生A）とのバリエーションがあった。小説の流れにおいて重要な人物であることを根拠に挙げた学生が3名いた（学生D、学生E、学生F）。

最終部分の段落のセンテンス「恵まれない側の人間が、こちら側に忍び込む一つの道」については、初江についての描写であることの読み取りに困難を要したことは前述したが、隣接する文の「ベッドの中では、その恵まれた分け前をむさぼるように「来訪者」が…」については幸恵のことであると適切なテキスト理解がされていた。

以下3の解答のように「この小説においては「来訪者」という呼称に良くない意味がある」と解答した学生が他に1名いた（学生B）。

3. 最初の文から読むと来訪者という言葉はやはり初江さんについて言及をしたと思っていたが最後の文まで読んだら分かったのは実は来訪者の意味としては幸恵のことについて話します。小説の全体内容を表せられながら真樹子さんの気持ちにも明らかに表せられます。じっくり読まないとい実の意味が曖昧になっているかもしれません。来訪者というのは遠いところから家に訪れる人、ちょっと冷やかな呼び方だと思います。さらに、なぜ幸恵さんが来訪者と呼ばれているのかというと来訪者の意味のように実はうちの子ではなくて初江さんの孫なんだ、真樹子さんが呆れてきました。（学生E）

推論タイプ8の定義が明確かつ具体的であるも

のは、併せて3つ以上の他の推論タイプの出現があった。代表的なものとして、タイプ7、13が挙げられる。学生は「来訪者」の意味は「恵まれた／恵まれない」の境界に対する両者の認識のギャップを踏まえたものとして捉えられていないことは前述したとおりだが、推論タイプが複数組み合わせりタイプ8の定義が明確になることで、境界に対する両者の認識のギャップを踏まえた教師の想定解により内容として近づく傾向もみられた（上記3の例）。工程6における推論タイプ13は、6解答中5例であった。工程6の解答が未提出の学生は、工程7においても推論タイプが8と4の2つに留まった。

7. 考察とまとめ

本稿分析対象回の物語文「来訪者」は、タイトルの意味の解釈が主題の把握に繋がるものであり、名詞句が示すものへの推論（8.Instantiation of noun category）は要となるものであった。主題把握の前段階のテキスト理解にかかる推論処理においても、名詞句の示すものがなにかを適切に把握しつつ読み進めることはその先の精緻化推論に関わる理解段階に大きく影響する。

名詞句が示すものへの推論（8.Instantiation of noun category）と同様、重要度が高いものとして、文脈の把握に大きく関わる格構造の役割理解（2. Case structure role assignment）が挙げられる。

学生自身の記述解答における「対比」の語の意味に曖昧さがみられたが（5節の論述解答2の例）、テキスト理解の段階における格構造の役割理解（2.Case structure role assignment）のつまずきによる補助的な質問で「対比的」というキーワードを用いたことが少なからず影響しているように考えられる。登場人物把握の段階のヒントとしての問いのなかで示された「対比関係」という語がそれぞれの社会階層を比較するものとしての定義に固定されてしまい、より概念的意味合いへの意味理解としてテキスト読解を進める過程で捉え直す

ことに困難が生じたと考えられる。

推論発問活用の際の困難点をまとめると、①発問文の文章内の語彙が学生にどのように解されるか即時的に把握することの難しさ②格構造の役割理解など局所的推論に関わる部分のつまずきによりテキスト読解が十分でない場合、どのような発問が適切であるかを即時的に判断しなければならないことが挙げられる。

最後に、工程8において、推論発問について解答した6名中4名の解答を以下で紹介する。学生が自身の読み方をどのように捉えているか「教室活動での読解と自分ひとりで読むこと」をテーマに記述解答を求めた解答の一部である。当授業の教室活動で「推論発問」を用いたことを語として明示的に示し、それについて述べるかどうかは自由とした。

「まとめる考え方を意識した。キャラクターの関係、疑わしいところを推理することができた。作者の書く意図も考えた。」(学生C)

「推論発問によって内容をもっと知りたいと思う。次は何をおきのかだいたい想像できる。しかし、もっとはやく読めるのではなく、ちゃんと最初から最後まで読んでないとわからない。」(学生E)

「推論発問された後はその問題に集中する。集中すると発見はある。」(学生G)

「質問によって、同じところを何度も読む。自分で読むときは、ストーリーの進行や意味がわかれば二度目は読まない。」(学生H)

教材：

阿刀田高 (1982) 「来訪者」『ナポレオン狂』講談社

参考文献：

Graesser, A. C., Singer, M., & Trabasso, T. (1994) .Constructing inferences during narrative text comprehension. *Psychological review*, 101 (3) , 371.

紺渡弘幸 (2011) 「読みへの意欲を高め、深い読みを促すのか」田中武夫, 島田勝正, 紺渡弘幸『推論発問を取り入れた英語リーディング指導-深い読みを促す英語授業.』三省堂 pp.150-159.

邑本俊亮 (2000) 「第二言語の文章理解過程に及ぼす習熟度の影響：文再認課題による実験」21『読書科学』44号 pp.43-pp.50

田中武夫 (2014) 「英語読解指導における足場掛けとしての推論発問の活用」『第2言語習得研究と英語教育の実践研究』山岡俊比古先生追悼論文集編集委員会編, 東京開隆堂 pp.205-216.

Van Dijk, T. A., Kintsch, W., & Van Dijk, T. A. (1983) . *Strategies of discourse comprehension* New York : Academic Press. pp.11-12.

吉田真美 (1998) 「Poor Reader は推論が苦手か? -テキスト提示条件が推論問題の成績に与える影響について-」『ことばの心理と学習-河野守夫教授退職記念論文集』金星堂 pp.269-281

吉田真美 (2001) 「テキストを超えた理解：読みにおける推論過程」門田修平・野呂忠司『英語リーディングの認知メカニズム』くろしお出版 pp.149-169.

(よこた・あつこ 聖学院大学基礎総合教育部非常勤講師)